

第63回全日本教職員バドミントン選手権大会レフェリー報告

熊本大会に寄せて

レフェリー 矢畑 雅史

暑い夏でした。

新幹線の駅を降りるとそこは山あいののどかな風景。迎えに来ていただいた車に乗って振り返ると大きな駅舎と高架があり、その後ろには新築の拠点病院という不思議な光景でした。迎えに来てくださった先生や事務局長の先生にはそのあと何度も送迎していただき、興味深い話をお聞きすることができました。この地に稲作文化の最も古い遺跡が残っていること。きれいで豊かな川。浮かんだのは柳田国男の「山の道」と「海の道」でした。ここから広まった稲作文化がそれまでの人々をやがて山へと追いやったのかもしれない、そんな思いもよぎりました。それから数々の名選手が熊本から生まれていること、今はもうさせられないようなトレーニングを夢中になってやっていたこともお聞きしました。古い記憶は今でも熱く息づき、記憶にもない原風景が脈々とつながり、この地のバドミントンの中に流れているのだと、そんなことを車窓から眺めながら感じて過ごした大会でした。

本当に、暑い夏でした。

熊本は火の国。平成28年の熊本地震で大きな被害にあわれたばかりですが、大会初日に緊急地震速報が鳴り響き、そして大きく揺れ始めました。そこで放送によりプレーを一度中断してもらい、5分強の中断を経て安全を確認してから再開していただきました。また両会場ともサブアリーナには空調がなく、会場内の冷気を扇風機で送るなどの工夫をし、試合を行いました。暑い中で熱戦を繰り広げた皆さん、お疲れさまでした。あるいは本当の夏の大会を経験できて幸運でした。とはいえ、あまり暑い中で試合を続けることもできません。玉名会場の団体戦では体育館温度が34度になるところでメイン会場に移っていただきました。さまざま思いもよらないトラブルもありましたが、松田先生はじめ係の方々の適切な判断と実行力、また主審の皆さんの会場設営を含めた協力と正確なジャッジとによって乗り越えることができたと思います。そして、高校生の補助員の皆さん、本当にありがとう。素晴らしいプレーヤーになってください。

試合も、熱い戦いでした。

一般団体は激しいラリーと素晴らしいレシーブに目を奪われましたし、壮年やHAの団体は意地と意地のぶつかり合いで、時に足を引きずりながらも励ましあって打ち続ける、素晴らしいファイトでした。個人戦も同様で、素晴らしいプレーの連続でしたが、終わった後相手を称えあう、あるいはプレーについて語り合う姿が、これぞ教職員大会なのだと感じさせてくれました。特に一般女子ダブルスで体力を削りあって最後まで打ち続け、消耗し尽くした決着のあとで、誰もいなくなった会場のコート脇でずっと話していた両ペアの姿がそれを最も象徴していたと思います。

レフェリーとして過ごしましたが、組み合わせの前から閉会式まで、デピュティーレフェリーの吉川先生には本当にお世話になりました。わからないことはすべて吉川先生に確認して行うことで乗り切ることができました。また教職員連盟の高橋先生や谷上先生、沖先生にもレフェリー業務をお手伝いいただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

振り返るとそこは、あつい、あつい夏でした…。